

集合住宅団地におけるコミュニティのための パブリックスペースについての考察と提案

A study and proposal of public spaces for community in housing complex

11023005 陳メイ

主査 篠原聡子 教授

副査 小谷部育子 教授

副査 佐藤克志 准教授

パブリックスペース、コミュニティ、集合住宅
public space, community, collective housing

第1章 研究背景と目的

1-1 研究背景

1-1-1 居住環境におけるパブリックスペースの必要性

現代の社会では、携帯電話やインターネットなどの普及によって、人と人との交流にも大きな変化がもたらされた。ツイッターやフェイスブックなどのバーチャルな空間では、時間と場所に限定されず、不特定多数の人と通信することができる。携帯やパソコンの画面だけ見つめ、実際に周囲にいる人たちには全く興味を示さないような人も見受けられる。

その一方で、もし私たちが望んだとしても、私たち自身が普段生活している地域の中に、人と実際に交流できる場所はあるのだろうか。

大型集合住宅の場合にはデザインされたロビーや集会室などがあるが、マンションと戸建てが混在するような地域では、留まることができる場がなく、立ち話さえも難しい状況にある。近所と交流を持つ機会がなければ、毎日の生活を周辺の人と全く関わりなく送ることになる。

そして近年、新たな集住体として、シェアハウスが話題となっている。シェアハウスを選択する理由として、家に帰った時に誰かがいるという安心感や、話ができる相手がいるなどが挙げられる。さらに、多様な生活環境の人と触れ合うことで、自分の生活にも刺激を受けることができる。人々は、日常生活における人との交流を求めている。しかし交流を求めているにもかかわらず、プライベート空間の減少や他人と生活する中での気遣いに対しては、リスクを感じているのが現状である。

このような社会状況からみると、現在「交流できる」パブリックスペースは不足、あるいは需要に対して適応していないのではないかと考えられる。地域で共同活動を行うことによって、居住者は強いコミュニティ意識を持つようになる。どのような人でも、どのような時間帯でも、自由に使用できる生き生きとしたパブリックスペースはコミュニティにとって大事な空間であると考えられる。

1-1-2 大型集合住宅のパブリックスペース

近年、不動産会社や建設会社などが新たに大型集合住宅を計画するときには、パブリックスペースも含めて計画されることが多い。このような集合住宅の中には、パブリックスペースを居住者の要望に答えてデザインし、オートロックで管理し、居住者にとっては居心地のいい環境が成立しているものもある。

しかし、周辺のマンションや戸建てなどの住民から見ると、入り口では警備員にチェックされ、フェンスが高く中の様子も見えず、まるで守備固い城のように街の中に立っただけである。利用することのできない空間はネガティブな印象しか与えない。工夫された空間でも、使用者を限定することによって、集合住宅の居住者と周辺の住民の間では、コミュニケーションの壁にすぎない。

1-1-3 パブリックスペースの定義

本研究がコミュニティの交流を論ずる際に言及するパブリックスペースは、主に建物の外の共有空間を示すこととする。

コミュニティの交流がどのような影響を受けて活発に

行われているのかを検討すると、さまざまな要因が考えられる。コミュニティの居住者の意識、団体活動、サークル、組織構成などソフト面の要因もあれば、どのような場所でのような活動ができるかといった空間の規模、スケール、特性などハード面の要因もある。

本研究では、最終的に建築計画というハード面での提案を行うため、ハード面の要因に着目する。中でも、建物の周辺に良い空間があるかどうか、コミュニティの交流に大きく影響を与えると考えるため、本研究では特に説明がない場合、パブリックスペースとは、外部空間におけるパブリックスペースを示す。

1-1-4 研究目的

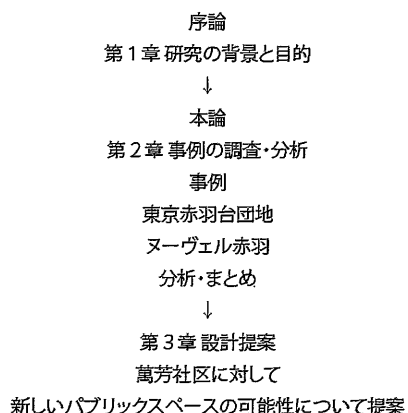
地域は様々な人々で構成されているため、いろいろなグループ、いろいろな時間帯に適する交流場所が必要だと考える。さらに、そのような「交流できる」パブリックスペースが存在し、そこで活動することによって、住民のコミュニティ意識は強くなる。さらに、新たにその地域で暮らし始める人にとっても、容易にその地域の構成や雰囲気把握でき、スムーズに地域にとけこむことが可能となる。

現在のコミュニティにおける建物内の共有空間の大半は、地域の住民が目的を持って行くところだが、目的がなければ行く機会もなくなる。しかもこれらの空間の多くは時間的な制限があり、行きたくても行けない場合もある。外部空間のパブリックスペースならば、時間的な制限がなくいつでも行ける場所となりやすい。自然に人と人が出会うきっかけとして一番良い空間ではないかと思う。

事例としてあげた赤羽台団地は、昔からコミュニティの交流や活動が継続的に生き生きと行われている。赤羽台団地の一部を建て替えて建設されたヌーヴェル赤羽も、その雰囲気を継承し、コミュニティの交流が続いている。こうした集合住宅におけるパブリックスペースの在り方を、実際に住みこなされた事例を通して分析し、新しいパブリックスペースの可能性を台湾台北の萬芳社区に対して提案する。

1-2 論文構成

本研究は3つの章で構成される。



序論となる第1章の研究の背景と目的は、現代社会におけるパブリックスペースの現状と、居住者との関係性について説明する。

本論は、2章と3章からなる。第2章では、2つの事例の調査を通して、団地内のパブリックスペースにおける規模、要素、魅力、愛着、使い方などから、パブリックスペースの在り方について比較、分析を行う。第3章では、第2章の分析とまとめを元に、萬芳社区において新しいパブリックスペースの可能性について提案する。

第2章 事例の調査・分析

2-1 事例の選定

本論文では調査事例として、赤羽台団地とヌーヴェル赤羽を選定した。

赤羽台団地とヌーヴェル赤羽はそれぞれ、日本住宅公団と独立行政法人都市再生機構(以降、UR都市再生機構)という、公的な機関によって建設された。

赤羽台団地は1963年の建設当時、いろいろな斬新な試みを総合して設計された団地である。住戸のプランだけでなく、住棟の配置や外部空間などにもさまざまな新しい試みがなされた。団地内の豊かなパブリックスペースは、住民によって多様に住みこなされ、住民は愛着を感じている。

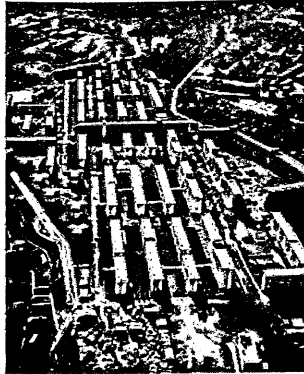
ヌーヴェル赤羽は、赤羽台団地の一部を建て替えて建設された集合住宅で、1993年から建て替えのための調査が

進められていた。建替え前の赤羽台団地の雰囲気を継承するよう、共用空間などが計画されている。自治会を中心にさまざまな活動やイベントなども活発に行われている。

これらの集合住宅におけるパブリックスペースの在り方を、実際に住みこなされた事例を通して分析する。

■表1 赤羽台団地と
ニューヴェル赤羽の年表

1955	日本住宅公団設立
1960	赤羽台団地建設開始
1962	赤羽台団地入居 管理開始
1963	赤羽台団地全体完成
1993	団地建替計画検討調査
2000	ニューヴェル赤羽 第一期居住者説明会 第一期地区建替事業着手
2006	第一期ブロック戻り入居



■図1 赤羽台団地竣工時の写真

■表2 日本東京の赤羽台団地と
台湾台北の萬芳台区の比較について

赤羽台団地	ニューヴェル赤羽	萬芳台区
竣工 入居 棟数 戸数 アクセス (18赤羽駅から) 車3分 徒歩7分 面積 185300m ²	竣工 入居 棟数 戸数 アクセス (18赤羽駅から) 車3分 徒歩7分 面積 45027m ²	竣工 入居 棟数 戸数 アクセス (休羅線萬芳台区駅から) 車1分 徒歩3分 面積 148500m ²
公共施設 集会所 駐車場 登陸場 ゴミ収集場 中庭	公共施設 商店 郵便局・銀行 集会所 駐車場 登陸場 広場・公園	公共施設 区民センター - 体育館 - 教室 - 図書室 スーパーマーケット 広場 公園 プール

2-2 事例①: 赤羽台団地(1963年一)

2-2-1 概要

赤羽台団地は東京都北区に位置し、山手線圏内から電車で10分の距離で大変利便性のよい地域である。武蔵野台地の変化に富んだ景観や、赤羽自然観察公園、荒川河川敷など豊かな自然環境にも恵まれている。赤羽台団地は、東京23区内初めてとなる1000戸を超える大規模の団地開発である。国や東京都からの要望を受け、将来の都心居住のモデルとして、さまざまな工夫が施され実験的な集合住宅として計画された。

一般に多く見られる平行配置型に加え、直交型・中央に公園がある囲み型などバラエティ豊かな住棟配置になっており、単調な街並みを避けることができた。住戸タイプは、同時期に建設されたほかの団地と比べて圧倒的に多い。また、小学校2ヶ所、中学校1ヶ所、幼稚園2ヶ所、商店街、郵便局、診療所、集会所など、いろいろな生活関連施設が設けられた。それ以外にも、子供たちの遊び場が5ヶ所、運動を主体とする広場が3ヶ所、団地内に分散して配置されている。



■図2 赤羽台団地の配置図

2-2-2 日常・非日常の活動スペース

赤羽台団地では、日常的に多数のパブリックスペースにおいて、住民の活動が見られる。それぞれ特徴を持つパブリックスペースが団地内に分散して配置されているため、住民は敷地内を自由に歩き回り、思い思いの時間を過ごすことができる。

また、さまざまなイベントが自治会の活躍によって、団地内のパブリックスペースで行われている。日頃から住民がよく集まる中庭と古墳公園では、夏祭りなど団地全体のイベントが行われていた。また、ほかのパブリックスペースに比べて、開放的で広さも充分にあるじゃぶじゃぶ池は、様々なイベントに利用された。

2-2-3 プランニングの分析

赤羽台団地の住戸タイプは単身者向けの1Kから、4~5人の家族を想定した4DKまでが計画されている。さまざまな世代が一つの地域に住む中で、どのようにコミュニティ意識を形成していくかという課題に対して、配置計画などに工夫がみられる。

赤羽台団地におけるパブリックスペースを、住棟に囲まれている「囲み型」、住棟に隣り合っているが多方面からアクセスしやすい「開放型」、通路上にある「通り抜け型」の3タイプに分類する。「囲み型」の中庭と古墳公園は、周辺の住棟の1階と半地下階に商業施設、公共施設、集会所などがあるため、自然とコミュニティの中心になった。「開放型」の動物公園、くらげ公園、8の字の公園は、住棟に隣り合ってその住棟の住民たちだけの庭になりがちであるが、遊具が設置されているので、子供たちがよく遊びに行く場所になり、保護者も行きやすくなった。「通り抜け型」の太鼓橋公園、花木園、じゃぶじゃぶ、トンネルの上の公園は、複数の住棟に跨がり、住民が頻繁に通る道沿いにあるため、出かける時や帰る時にその場での活動を見ることができる。何回か通るうちに面識ができて、活動に参加するきっかけにもなる。

2-2-4 動線の分析

赤羽台団地のパブリックスペースは団地内に分散しているため、駅から家に帰る途中で、いずれかのパブリック

スペースを通ることになる。パブリックスペースを通ることによって、いつも同じ時間帯で会う人同士、お互いをよそ者としてではなく、同じ団地内に住む住人として認知することができる。このようなことだけでも、近隣の住民と触れ合う機会は増し、コミュニティの雰囲気を変化すると考える。

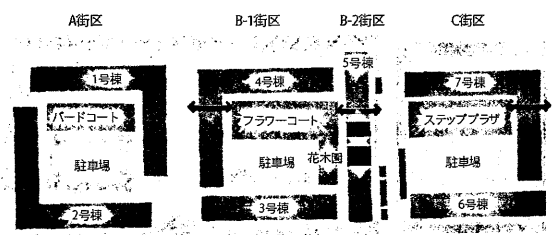
赤羽台団地は、車の通行の多い道路によって、3つのエリアに分割されている。エリアAの中庭と古墳公園は車道によって団地から切り離された印象があるが、1階が公共施設と商店であることにより、目的を持つ住民は団地全体から訪れる。動物公園は比較的、隣接する住棟の住民以外の利用が少ない。エリアBの太鼓橋公園、花木園、じゃぶじゃぶ池、トンネルの上の公園の4つのパブリックスペースは、車が通らないことによって安全に歩き回ることができるため、散歩などの行為を誘発していると考えられる。エリアCの8の字公園は、赤羽台西小学校への通学路でもあるため、利用者は少なくない。

2-3 事例②:ニューヴェル赤羽(2006年一)

2-3-1 概要

ニューヴェル赤羽は、1963年に竣工した赤羽台団地の老朽化への対応、また居住水準の向上と周辺との一体的なまちづくりを目指し、UR都市再生機構によって行われた建て替え事業である。テーマとして「地域に開かれた良好な環境のまちづくり」を掲げ、2000年から建て替え事業が始められた。

建物内外のパブリックスペースには、コミュニティの記憶や歴史を継承しながら、新しい居住者も参加できるようにさまざまな工夫がされている。自治会を中心に使われる集会室、サークルが活動できる空間や、夏祭りを開催するパブリックスペースなども、居住者と意見を交換しながらデザインされ、現在も住民によって住みこなしが進み、愛着を持たれるニューヴェル赤羽が育ちつつある。



■図3 ニューヴェル赤羽の配置図

→ 通り抜けるピロティ

2-3-2 日常・非日常の活動スペース

ヌーヴェル赤羽では赤羽台団地と比べて、大人によるパブリックスペースでの活動はあまり見られない。子供たちの姿は見るが、そのまま通り抜けて、既存の赤羽台団地のパブリックスペースや付近の小学校へ遊びに行く傾向が見られる。

また、赤羽台団地の時代から続いている夏祭りは、開催場所をヌーヴェル赤羽内に移し、現在も行われている。

2-3-3 プランニングの分析

ヌーヴェル赤羽のパブリックスペースについても3つのタイプに分類する。

A街区とB-1街区は9階から12階までの住棟に囲まれている「囲み型」である。B-2街区に隣接するイチョウ通りは「通り抜け型」になっており、両サイドの集会所棟には住民と意見交換しながらデザインした多目的に使える集会所が設置されている。普段は車を通さないようにし、さまざまな活動が行われている。C街区のステッププラザは「開放型」である。座るところがあり、ヌーヴェル赤羽の中で最もアクセスしやすいパブリックスペースになっている。縦方向の住棟の4号棟、5号棟、7号棟には通り抜けできるピロティがあり、4つのパブリックスペースをつないでいる。

駐車場の巨大なボリュームを視覚上少しでも軽減するために作られた、B-1街区の二段階のウッドデッキとオープンテラス、C街区のウッドデッキとステッププラザは明るくて楽しく回遊できる空間となっている。

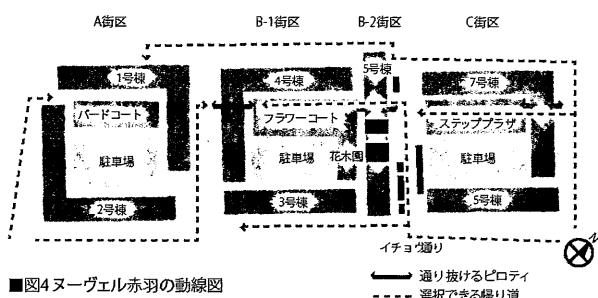
フラワーコートには、休憩や座ることができるようにベンチが設置されている。しかし、調査の時間帯内に、このベンチに座っている人をほとんど見たことない。これは、このベンチが動線のすぐ横に設置されているためだと考えられる。

2-3-4 動線の分析

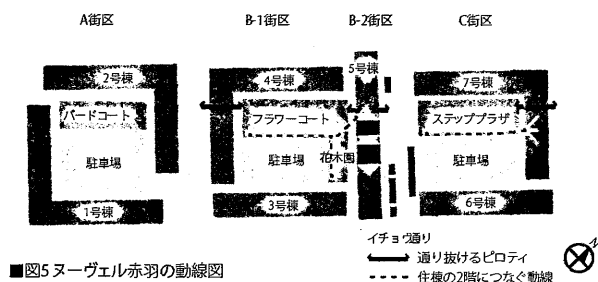
建て替え後のヌーヴェル赤羽への駅からの動線は、建て替え前の赤羽台団地とあまり変わっていない。5号棟に集会所や自治会などが設置されているため、ヌーヴェル赤羽の住棟への主要な出入り口はイチョウ通りになっている。告知したい事項や宣伝したいイベントがある場合、

一番目立つイチョウ並木の入口にテントを設置して、住民たちに注意を促すこともある。

ヌーヴェル赤羽のパブリックスペースはピロティでつながっているのも、徒歩で家に帰る人にとって、帰り道を選択によってはいくつかのパブリックスペースを通ることも可能である。さらにパブリックスペースの中央にそれぞれ駐車場が配置されており、車で帰宅した場合は、住戸まで行くために、1階から中庭を通ることも、住棟の2階と連結するオープンテラスやウッドデッキの道を通ることもできる。駐車場への出入りの道は、もはや暗い地下室のイメージではない。



■図4 ヌーヴェル赤羽の動線図



■図5 ヌーヴェル赤羽の動線図

2-4 まとめ

現代人の生活の大半は、職場と家の往復を繰り返し、それ以外の場所での活動の機会が減少し、新しい出会いも少なくなっている。それは現在の高密度化の進む都市では避けられないことかもしれない。しかし、近隣の人たちを誰一人知らないという状況には疑問を感じる。このような状況は、居住環境のデザインによって改善することが可能だと考える。

赤羽台団地内の多様なパブリックスペースから、ヌーヴェル赤羽では、集約的なパブリックスペースへと変化している。まとまったスペースは確保されたが、かつての赤羽台団地にあった、経路の選択性や回遊性は、減じられた。現在の高層化・高密度化の進む都市の状況では避けられ

ない変化である。しかし、その状況の中にあっても、住民にとってパブリックスペースの存在の重要さに、変わりはない。パブリックスペースでさまざまな活動を行うことを通して、住民のコミュニティ意識が高まり、自分の住む地域に対する愛着が湧いてくる。それこそが集合住宅におけるパブリックスペースの重要な役割だと考える。

そのようなパブリックスペースを計画するために必要な要素を、2つの事例から抽出する。

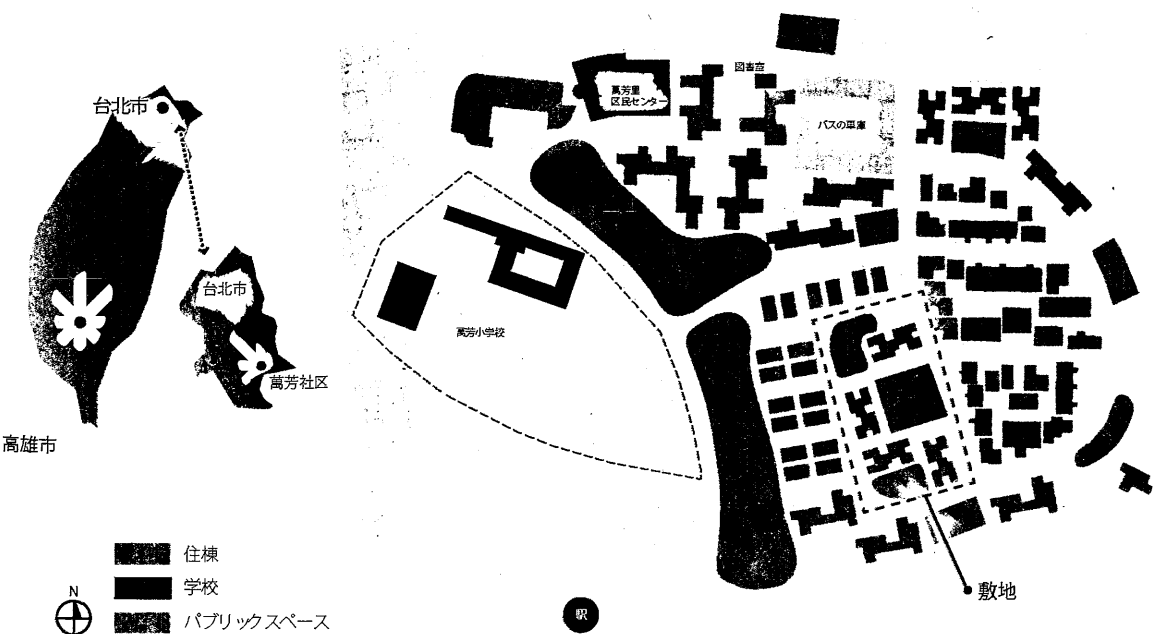
- ・車道によって、コミュニティの関係性は切断される。
- ・「囲み型」のパブリックスペースは、ある程度の規模がない場合、周囲の住棟に気を遣わなければならないので、現代の社会では日常的には使いにくい空間となる傾向がある。
- ・「開放型」のパブリックスペースは、多方面からアクセスしやすいため、多くの人々が訪れやすく、非日常の活動やイベントに向いている。
- ・「通り抜け型」のパブリックスペースは、日常生活と関連づけることで使う頻度が高くなる。しかし、主な動線に近すぎると滞留しにくくなるため、注意が必要である。
- ・「開放型」と「通り抜け型」を隣接させることにより、必要に応じて一体的に使用することができる。イベント時など、広いスペースが必要な時にも対応できる。

3-1 敷地概要・現状

萬芳社区は台北盆地の南側に位置し、台北市政府が1983年に建設した国民住宅である。中国語の「社区」は、「コミュニティ」の意味であり、台北市において、一つのコミュニティは一つの市町村の行政区として管理されている場合が多い。山の中腹に位置し、標高140メートルの萬芳社区は、静かな環境で自然があふれている。

当初、萬芳社区は敷地内全てを国民住宅として建設する予定だったが、経費の不足で一部の敷地を民間に売り出し、現在は国民住宅1207戸と民間住宅701戸が混在している。

1983年の政府による全体計画によって、郵便局、小学校、区民センター、図書室などの公共施設がかなり充実しており、様々な規模のパブリックスペースも10ヶ所以上計画された。建設当時は、いくつかのパブリックスペースに同じ遊具とベンチと東屋が設置されていたが、30年近い年月が経過し、これらのパブリックスペースは近隣の住民が手を加えることによって、住みこなしがなされた生き生きとした空間となっている。



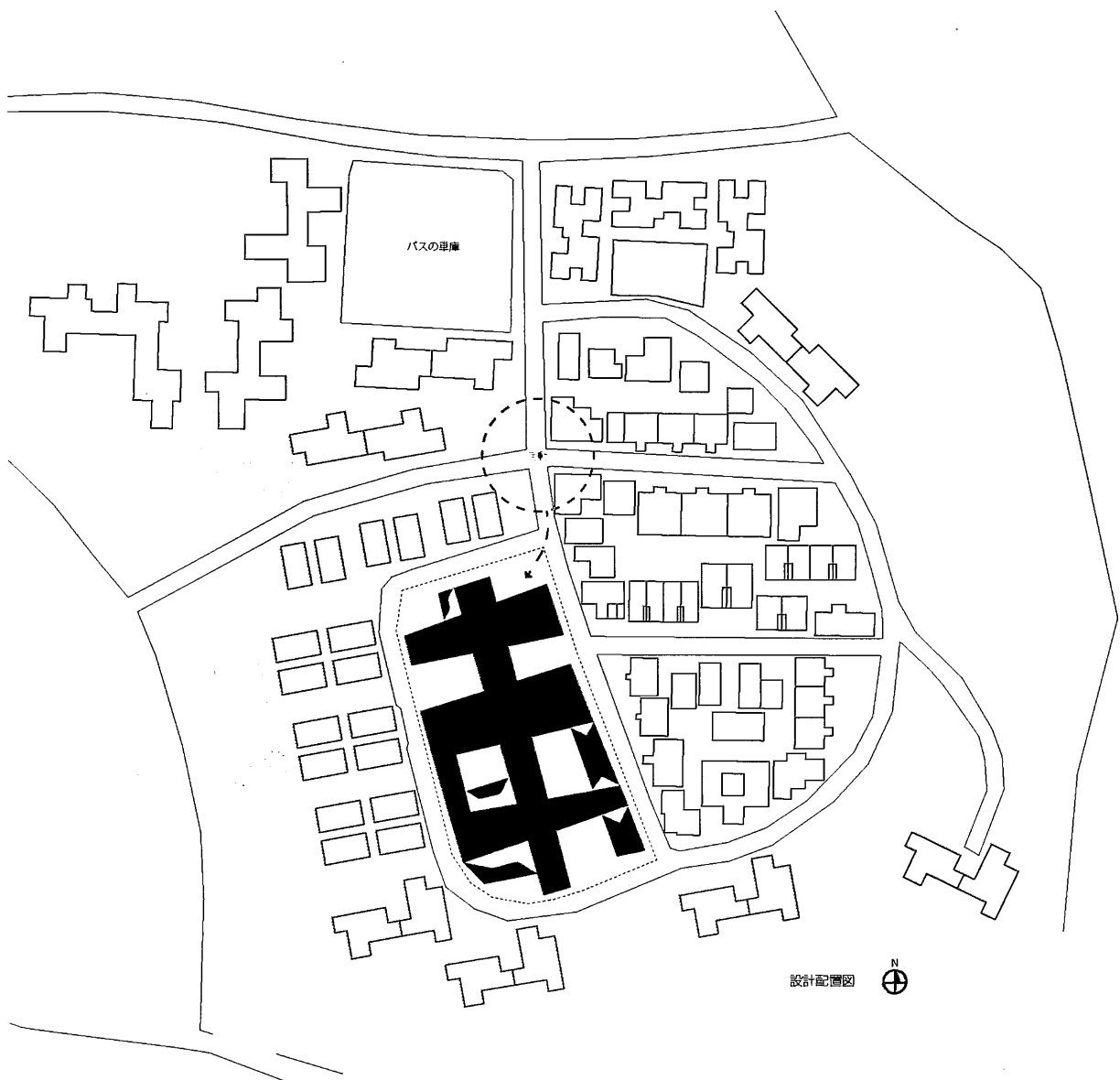
■図6 台湾台北の萬芳社区の配置図

3-2 提案目的

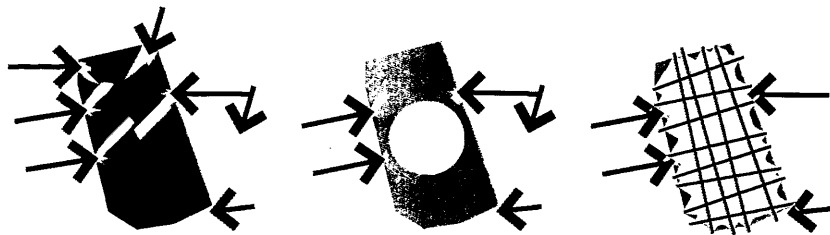
ひとつの地域の中では、通り抜け型のパブリックスペースと開放型のパブリックスペースが同時に必要だと考える。住民にとって、通り抜け型のパブリックスペースは回遊できる空間でありながら、開放型のパブリックスペースはコミュニティ意識を起すための空間である。

現在の萬芳社区においては、区民センターが自身の役割を果たしてないと思う。そこで行われている活動が一般住民の伝わっていない。その一方、住民が最も多く集まるや初めてとところ、同時に初めてここに来る人がと訪れるところは、社区の中心位置にあるコンビニの前である。しかしそのスペースは狭いため、活動が車道までに広がっているのは現状である。

萬芳社区に対して、適するパブリックスペースを含めた集合住宅を提案したいと思う。



平面のコンセプト



多方面からのアクセス
通り抜けできる敷地

滞留できるようにする

通り抜けれる道をつくる

断面のコンセプト

住棟内に回遊性のある道をつくる

